

宋連玉著（有志舎、2023年）

植民地「公娼制」に帝国の性政治をみる 釜山から上海まで

菊地 夏野*

1990年代に被害女性たちがカミングアウトして日本軍「慰安婦」問題が明らかになって30年以上経った。わたしはちょうどその時代に大学に入学し、「慰安婦」問題の経過を見ながら自己形成した人間である。2000年代以降、バックラッシュが激化し、社会的レベルにとどまらない政治的なレベルでの封じ込めが確立するのを怒りを感じて見守らざるを得なかった。

90年代の戦後補償を求める運動は市民の力強いうねりを巻き起こし、アジアの各地から被害者たちをお呼びし集会を開いた。あの頃の運動の雰囲気懐かしく思える。現在、あのようにアジア全域へ手を繋ごうとする余裕を持つ運動は多くはない。しかし、本書の問いは、当時の市民運動や言論がはらんでいた限界性を鮮やかに浮き彫りにする。

それは、吉見義明がこの問題の研究を牽引した歴史学者らの認識に代表されるものだ。吉見らは、「慰安婦」制度と公娼制の違いを強調し、公娼制に比べて「慰安婦」制度の暴力性は大きいとした。これに対して鈴木裕子らは反論し、両者の共通性や連続性を重く見た。この論争は当時注目され、わたしも拙著『ポストコロニアリズムとジェンダー』（2010年）で取り上げた。宋が指摘するように、吉見らの認識はわかりやすく、戦後補償や問題解明を求める当時の運動と言論に勢いを与えた。しかし、大きな禍根を残すことにもなった。

例えば2010年代の朝日新聞バッシングにおいて、右派が問題としたことのひとつが、被害女性が「キーセン」出身であったことを報道しなかったということだ。右派は従来から、「慰安婦」女性と「公娼」ら売春女性を同じものとし、「金目当ての淫売」として中傷した。そのような言説状況の中、「慰安婦」被害女性を公娼と切り離して謝罪と補償を求めるのは、短期的には理解されやすくて

も、本質的には、そのような右派の差別的歴史観を批判することができない。

ここで抜け落ちているのは、宋が本書で論じる「慰安婦」制度と公娼制度の連続性である。朝鮮半島や中国大陆における日本政府と日本軍の展開に伴う売買春管理の変遷をみれば、公娼制を中心とする性管理と不可分のものとして慰安所が設置されていったことが明瞭になる。

公娼制がそれ自体として戦前日本の家父長制を構築する基盤的制度の一つであった以上、「慰安婦」制度と公娼制を切り離す必要がどこにあるのだろうか。それはやはり、公娼制のような売買春の問題に対する理解の不足であろう。

しかしもちろん、吉見ら研究者や市民運動に女性差別や家父長制への問題意識がなかったわけではない。そうではなくて、売買春の問題が複雑で、現在の学問や言論では解きほぐせない、いや逆に、現在の学問や言論が理解を拒む対象であるからだ。それは90年代も現在もほとんど変わらない。「売買春／セックスワーク」をめぐる今でも大きな混乱と対立が続いている。

その意味で本書が提示している認識は、そのような対立を超える、通底した問題意識である。

本書は、性管理における日本政府と日本軍の定見のなさを抉り出す。政府らは、拡大する日本軍の領域に伴い、性病や性暴力を軽減する性管理政策を必要とする。同時に、諸外国からの批判をおそれ、日和見的に形式を変化させる。しかし変わらないのは、形式上女性の「自発性」によるように見せながら、実態は高額な前借りと過酷な労働環境、そして厳格な性病検査で女性を縛る二重性である。

そして本書が指摘する、この性管理政策の各所に見られる民族差別である。本土と朝鮮半島、中国大陆それぞれで、日本人女性と朝鮮人女性は差

* 名古屋市立大学人間文化研究科

をつけられ、新聞等の報道においても表象のされ方が異なった。半島の経済が植民地化によりどんどん壊滅させられ、人々は困窮し、上海など大陸に移動せざるを得なくなるが、移動先で女性たちの生き延びるすべは零細労働や売春しかなかった。

植民地化は朝鮮人女性たちの生活を奪いながら、たどり着いた売春の世界でも差別したのである。宋が提唱する、そしてわたしも希求する「脱帝国のフェミニズム」はこのような歴史的現実から立ち上がる。階級と民族によって分断される女性。この分断の有り様を丁寧に従い、それに抗うのが帝国を脱するための方法であろう。

逆に言えば、脱帝国のフェミニズムを実現するには、「売買春／セックスワーク」への理解が欠かせないということである。本書でも度々言及される娼妓運動は、「売買春」を悪とし禁止することで平等を達成できると信じる。しかしそのように道徳的次元からのみ把握し行動しようとするのでは、「売買春」がどのような社会構造に置かれているのかわからない。「売買春」は結婚制度とともに資本主義社会のセクシュアリティ管理の要諦とされている。女性は結婚制度によって労働を搾取され、売買春差別によって結婚制度へ追い込まれる。であるからこそ、ラディカルなフェミニストはセックスワークを女性の権利として提唱した。しかし同時に、セックスワーカー差別は根深く構造的であり、そのように権利を訴える力を持つワーカーはわずかである。そのため、娼妓運動の被害者視が説得力を持ち、世論は傾く。性差別や資本主義の問題は解決できないから、当面、売買春を禁止することで被害者を救おうというわけ

である。けれども禁止からこぼれ落ちる売買春は必ず存在し、その環境は悪化することがワーカーたちの運動からずっと指摘され続けている。

この悪循環が終わらないのは、フェミニストの多くとワーカーたちに「階級差」があることも大きい。フェミニストとして発言力をもち得る女性の多くは学歴や階級、地位の高いひとびとである。売買春に携わる女性たちの多くはその反対であり、他に選択肢の少ない中でその仕事を選ぶ。差別される仕事につくことを身近に感じずに済む者が、そこにつかざるを得ない者たちの気持ちを想像するのは難しい。それよりは、単純に禁止しようとする行動することの方が容易い、それが「フェミニスト」として称揚されるのであればなおさら。

セックスワークの主張は、その仕事が「常に素晴らしく特別に価値あるもの」だからというより、「他の仕事と同じように、売る側と買う側のニーズがある」から必要なのであり、また労働の権利を主張することでその環境をより改善する必要があるからなされるのである。

公娼制や「慰安婦」制度のように女性への抑圧と暴力が明白なものはセックスワークとは当然言えない。セックスワークの主張はそれらのような暴力的制度を擁護するものではない。むしろ、いまだ完全に保障や実現のされなかったことのないセックスワークの権利を主張することで、現状を少しでも改善し、本当の意味での差別からの解放を目指すためにある概念である。であれば、本書が示すように、セクシュアリティの管理を不可欠とした帝国主義の解体こそ求められてくるのである。